

ためである。インドネシア国立文書館のあるアーキビストは、日本占領時代を“歴史の空白期だ”と語ったことがある。

そこで最近、東南アジアの諸国はオーラル・ヒストリーにたいへん力を入れている。その活動の中心になっているのは、たいてい各国の国立文書館である。いちばん進んでいるらしいのはインドネシアで、国立文書館が口述史部を設置し、すでに10年近くにわたってインドネシア側関係者の証言を収録し出版している。1989年にはその第4集『日本占領期を生きて—42人の回想』が出たという。

さて、ここに紹介した『証言集—日本軍占領下のインドネシア』は、インドネシア国立文書館のオーラル・ヒストリー・プロジェクトに呼応する形で1986年に結成された「インドネシア日本占領期史料フォーラム」(代表故永積昭東大教授、その後中村光男千葉大教授)が行ってきた聞き取り調査活動の成果で、日本側関係者17人の「証言」が収録されている。その内訳は、軍人3人、軍政に関わった軍属10人、企業関係者2人などである。

「証言」の内容や、聞き取り調査の方法等について詳しく紹介する余裕はないが、軍政研究の進展に大いに貢献する成果であることは間違いない。ただひとつ感じることは、東南アジア側がアーキビストによる国の記録遺産復元・保存事業の一貫としてオーラル・ヒストリーに取り組んでいるのに対し、日本側はもっぱら歴史研究者の個人的な努力によって対応しているというギャップである。もちろんこれは日本の文書館界ないしアーキビストの力量不足によるものだが、アジア・太平洋地域の旧日本植民地や旧日本占領地諸国の記録遺産の復元・保存事業に対して、日本は国として率先して協力する義務があるはずであり、それはアーキビストの仕事であるはずである。課題を突き付けられていると痛感する。

安藤 正人・国立史料館

### 証言集 —日本軍占領下のインドネシア—

インドネシア日本占領期史料フォーラム編  
東京 龍溪書舎発行 1991. 6  
760 p 21cm ¥9,500

東南アジアは、1942年から1945年まで日本の占領下に置かれ、軍政がしかれた。しかし当時の記録史料は極めて少ない。占領中に日本が現地記録を押収したり、日本敗戦時に軍政関係記録の大半が処分されたと考えられる